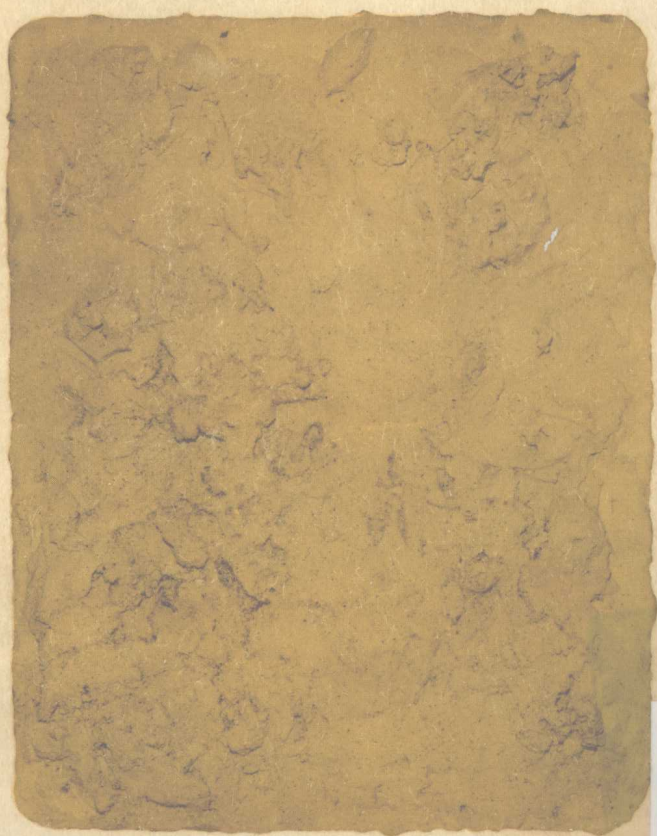


束 札 い 重

洋 野 佐



重　い　札　束

著　　者　　佐　　野　　洋
発　行　者　　佐　　藤　　亮　　一
発　行　所　　株式新　潮　社
 会社



東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (341) 7111-9番
振　替　東　京　8　0　8　番

印　刷　所　　塚田印刷株式会社
製　本　所　　神田加藤製本所
定　　価　　2 2 0 円

1962年11月26日　印刷
1962年11月30日　発行

乱丁，落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

佐 野 洋

重 い 札 束

新 潮 社 版

重
い
札
束

第 I 章

(一九六一年九月七日)

1

『技術者養成を促進』

四か年で二万人

か
明年度大学に34学科新設

それが、中央日報第一面のトップ記事であった。

何も掛けず、パジャマ一枚で蒲団に横たわって、新聞を拡げた檜山賢二は、その見出しに溜息をついた。何年か後、志を得ない落伍者が、また、この世の中に吐き出されるのか。檜山には、そのことが予見できるような気がした。いや、予見どころではなく、はっきりした

既成の事実なのだ。しかし、施政者たちは、そのことを知らない……。

——十七年前。ちょうど彼が中学を卒え、高等学校に進もうとしたころも、これと同じようなことがあった。理科系の拡充強化、文科系学徒の徴兵猶予停止。それが国策の名を以て進められた。中学校の教師たちも、理科系の上級学校を受験するように、生徒を説得した。

『人間の才能なんてものは、生れつき、文科系とか理科系とかあるものじゃない。無理に文科系に進んでも、いまの状態では、ゆっくり勉強できるかどうかわからないのだし、どうしても、理科系には向いていないという精神的不具者以外は、文科系を選ばない方がいいな。第一、理科系の優秀な人材を、国が求めているのだから……』

自分の頭脳が、どのような方面に向いているか、中学生に判断できるはずはなかった。檜山は、大勢に押し流され、いや押し流されているという意識も持たないまま、高等学校の理科を受けて、合格した。

戦後、そのようにして理科にはいつてしまった人々のために、各高等学校、大学とも、転科を認めたが、それに応じるのも、何か空々しい気がして、檜山はそのまま、理科にとどまった。もし、そこで転科をすれば、自分の本来の希望を殺して国策に協力したと、自ら認めてしまう格好になる。それが、自尊心の強い彼には、たまらなかったのだ。

しかし、結局、檜山は数字や記号を相手にする学問には、ついていけなかった。大学の工学部を二度受けて、二度とも落ち、大学に進学する希望を捨ててしまったのだ。（尤も、ちようどそのころ、瑛子をめぐる、ちょっとした事件があったことも、大学進学を諦めた一つの理由だったのだが……）――

あの、戦時中の理科系拡充と同じではないか。檜山は、新聞の見出しを眺めながら、そう思ったのだ。場当たり的な文教政策。わずか、三、四年先のことしか考えずに、一つの案を立て、それを押し切ってしまう。まして、それが、これから自分の進むべき道を選ぼうとしている少年たちに、どんな影響を与えるか、その人たちの人生を、どう変えるかなどとは、少しも考えていないのだろう。

すでに、窓は瑛子の手によって、開け放たれてあった。午後になると、早くから西日がさす、午前中は、通風がよく、ときどき空気の爽やかな肌ざわりを感じる。檜山は、からだの状態は、意外によいらしいと思った。寝不足の朝に、ときとして覚える手足、ことに指先のしびれが、この朝はなかった。

彼は新聞をそこに放り出し、大きな伸びをした。そして、この何となく精力のみなぎっている感じは、貴重だと思った。男は満の三十四、五歳から、身体的には下り坂に差しかかると言われている。いま、彼はその三十四歳であった。週刊誌用原稿のリライト、翻訳の下請

などで、たまに徹夜すると、低血圧気味の彼は、よく、手足にかすかなしびれを感じるのだった。そういうとき、たしかに、自分はいま、下り坂に差ししかかっているなど、自覚するのだったが……。

それが、いまはなかった。少なくとも、肉体的には、三十前のころと、それほど変わっていないのではないかと思われた。

「さて、やるぞ」

檜山は、好調な肉体を、はっきりと確認するようなつもりで、声を上げてみた。誰に聞かせるでもない。二間続きのこのアパートの一室には、現在、彼一人しかいないのだから……。瑛子は、すでに美容院に出勤している。

しかし、『さて、やるぞ』と叫んだ言葉に対し、彼の自意識がすぐに反問して来た。

『いったい、何をやるのだ?』

そして、檜山は唇を歪めた。自嘲の笑いのつもりだったが、笑いにもならなかった。ただ空しい息だけが、軽く開けた歯の間から洩れた。

彼には、すべきことはなかったのだ。ときどき、昔の仲間から回してもらっている、小さな仕事も、ここしばらくの間、途切れていた。それだからこそ、睡眠も十分にとり、からだが好調なのであろう。

仕事をもらったときは、時間に追われ、無理を重ねて、グロンサンの内服薬を続けて二本飲むようなこともある。早く、これを上げてしまつて、ゆつくり眠りたいというのが、そういう仕事をしているときの、檜山の希望だった。ところが、睡眠が十分にとれるようになり、多少の無理も利くと思われるころには、仕事がない……。一種の悪循環であつた。

彼は、パジャマを脱いで、裸になつた。そのズボンをとるとき、どういふ連想からか、瑛子を思つた。

そうか、水曜日かと、断片的な考えが彼の意識にのぼる。瑛子の勤めている美容院は、火曜日が定休日だったから、水曜は朝から、客が立て混むのだという。昼食の暇もないこともあるそうだ。そのためか、ほとんど絶対と言つてよいくらい、瑛子は火曜日の夜、檜山を求めない。

元気なのは、そのせいだろうか？ 檜山は、この即物的すぎるくらいの考えが氣にいった。いつか、瑛子に言つてやろうと思つた。

『いやな人』

眉を極端に動かす、瑛子のてれくさげな表情までが、想像できるようであつた。

リビング・キッチンには、いつものように、朝食が用意されていた。ハム・サンドにサラダ、そして、インスタント・コーヒーの粉末がはいったカップ。魔法びんの湯を、そのカップに入れば、彼の朝食はでき上がるのだった。

檜山は、ラジオのスイッチを入れてから、食卓についた。だれもいないのだし、瑛子に強制されているわけでもないから、畳の部屋で、横たわりながら、朝食を摂ってもよいのだが、彼は、必ず食卓に着くという習慣だけは守っていた。食事を、いかめしく考えるところのような気持からではない。ハム・サンドやサラダの皿を、畳の部屋に運ぶのが、なかば大儀だったのだ。

ラジオでは、ジェリー・藤尾がしゃべっていた。時計を見ると、九時五十分だった。『スター内緒話』という番組であろう。

だが、ジェリー・藤尾のしわがれ声の、とぎれた合間に、檜山の耳を打った物音があった。彼は、一瞬、その正体が判断できなかったが、頭だけは、反射的に、西側の窓に向けられていた。

雨であつた。急に降り出したものなのか？　かなり激しい雨足を持っている。それが隣の家のトタン屋根を叩く音が、彼の注意を奪つたのだ。

檜山は、食卓から立ち上り、窓にかけ寄つて見た。洗濯物の心配をしたのだった。しかし、それは杞憂であつた。ハンカチーフ一枚、靴下一足も、そこには干されていなかった。

彼は、改めて、瑛子の勘に感心した。雨が降りそうだと思ふとき、彼女は洗濯物を風呂場に干しておくのだが、この朝も、間もなく降雨があると考えたのだろうか？

雨の吹きこみを避けるため、ガラス窓を閉めてから、檜山は食卓に戻つた。

と、彼が食卓に着くのを見計つたように、ブザーが鳴つた。それは、玄関のドアに取りつけられたものである。このアパートは、玄関が一戸毎に、独立した造りになっていた。

何かの集金か、新聞の勧誘だろうと考えながら、檜山は玄関へ立ち、ドアの錠をはずした。

「やあ、どうも、朝っぱらから……」

檜山の眼に、派手なアロハの模様がうつつた。しかし、頭はなかば、禿げ上つていた。

「やあ。どうしたの？」

神田で、小さな印刷工場をやっている宮川新平であつた。

「いや、この間お借りした二千元をお返ししようと思ひましてね」

「そりゃあ、ご丁寧に……。ついでのときでよかったのに……」

宮川は、用心深く洋傘を持って来ていた。しかし、雨足は少しも弱まっていなかった。貸した金を返しに、雨の中をわざわざやって来た彼を、玄関で追払うわけにも行かず、檜山は宮川を招じ入れた。宮川も、それを予期していたように、遠慮もせず、部屋へ上りこんだ。

三日前の日曜日、檜山は映画を見に、銀座へ出た。そして、その帰り、新橋まで歩いて来ると、駅の近くで、

「あれ？ 檜山さんじゃありませんか？」と、声をかけられた。

「はあ？」

檜山は、しかしながら、相手がわからなかった。見覚えがあるようにも思ったが、それすら、あやふやであった。

「そうでしょう？ 例の天使書房にいた……」

「ええ、ぼくは檜山ですが……」

天使書房というのは、大学進学を諦めてすぐに、彼が勤めた出版社であった。中学生向きの虎の巻、看護婦試験の参考書といった種類の出版をしていた。そのころ、早急に月給を取る必要のあった彼は、社員募集の新聞広告を見て、応募したのだった。檜山は、そこに、昭和二十四年から二十九年までの五年間勤務した。給料は高くなかったが、美容師の資格をとるための瑛子の月謝は、その給料から支払われたのである。

天使書房は、しかし、檜山が編集長という肩書を貰った直後、潰れてしまった。いや、社長が意識的に潰したと言った方が、正しいかもしれない。潰れる少し前に、法人組織に切換えられていたから、社長個人の財産には、何の打撃もなかったと、当時の従業員たちは噂した。

「じゃあ、天使書房の隣にあった宮川印刷をご存じでしょう？　ときどきは、天使書房さんから、仕事も貰いました」

「ああ、そう言えば……」

檜山も思い出した。

天使書房は、ある運送会社の二階を借りていたのだが、その北隣が印刷工場であった。工員は五人足らず、中小企業とも呼べないような小規模のものだった。

主人は六十近くの顔の黒い男であった。一介の工員から、曲りなりにも、工場主になったことに誇りを持っていて、ときどき天使書房にやって来ては、常識的な人生論をぶっていた。男の子を二人、戦争で失くし、娘に婿をとった。その婿というのが、いま、檜山の眼前に現われた男であった。檜山が天使書房にいたころには、彼は某大手印刷会社に勤め、証券印刷をやっているということだった。

「思い出していただけでしたか？」

「ええ、しかし、そう言うては何だけれど、すっかり貫禄がついてしまつて……」

「貫禄？ ああ、この頭のことですな？」

宮川は、額の生え際のあたりを撫でて笑つた。そのあたりから、髪が薄くなり、ことさらに額が大きく見える。年齢は檜山とそれほど違ってはいないはずだから、その禿げ方は、どこか痛々しい感じであつた。檜山は、悪いことを言つてしまったと思つた。

しかし、当の宮川は、それを言われることに慣れているのかもしれない。笑いには屈託がなかつた。

檜山は、宮川に誘われて喫茶店にはいつた。かつて、それほど深いつき合いをしたほどでもなかつたのだが、宮川は妙に檜山を離れたがらなかつたのだ。

その喫茶店で、三十分ぐらいも話したろうか？ 宮川は、すでにあの六十過ぎの義父が死んでしまったこと、彼自身が、あの工場を経営しているのだが、最近は腕のいい印刷工は、どんどん大手の印刷会社に引き抜かれて困るというようなことを話した。

「ところで、檜山さんは？」

「いや、家でぶらぶらしながら、物を書いていますよ」

物を書いているには違いなかつたが、わざわざ、そんな表現を使った自分に、軽い嫌惡を感じた。『物を書く』と言えるようなものではない。他人の原稿に、手を入れて、一つのスタ

イルに統一し、また、決められた枚数に納めるだけの仕事ではないか？

「ほう、そうですか？ 天使書房の人は、皆さん偉くなってしまつて。南郷さんとこの前会つたら、週刊誌の編集長をしていると言っていました」

「そう。彼はあのころから、がんばり屋だったから……」

檜山の仕事というのは、その南郷から回して貰っているのだった。檜山は軽い不安を感じた。宮川が南郷と会っているのだとすると、そのとき、檜山のことも話題になったのではあるまいか？

『いや、あいつは、いわゆる『髪結の亭主』という奴でね。いい身分だよ。尤も、小遣いには不足するらしく、ときどき、うちの雑誌に雑文を書かせてくれなんて言ってくるが……』

もし、二人の間に、檜山が話題になれば、南郷はこのような紹介のし方をしたことだろう。

「それから。何と言いましたっけ、ご婦人がいたでしょう？」

「え？ ああ、樋口女史ね。賑やかな人だったが……」

檜山は遠い眼つきをした。天使書房が潰れると決つた日、檜山は樋口澄江と飲み歩き、別れ際に、どちらからともなく、唇を合わせたのだった……。いままで、ほとんど忘れていたのだが、急に、一種の懐しさで胸に迫つて来た。

「いまでも賑やかですよ。上野でバーをやっています……」